

唐津 一

いま日本の経済は不況に苦しんでいるとされているが、依然として強力であることは、その数字の示すところから見ても明らかである。GDPは1993年において、460兆円と世界の15%のシェアを持ち、貿易においても依然として巨大な数字を示している。

所得水準・貯蓄といった経済の指標だけではない。世界の先進国の中でも珍らしいくらいの低い犯罪率は豊かで平和な社会を示している、識学率も高く、余暇を示す指標としての海外旅行者数も上昇の一途をたどり1千万人の大台を越した。海外から日本を訪れる人々は、町の綺麗なこと、町を行く人々のマナーの正しさなどに生活レベルの高さを感じ取ってくれる。

だがしかし、日本が今日までこのように世界でも珍しいほどの繁栄を実現したということが、そのまま明日においても持続され更に発展するということの保証にはならない。

そして21世紀には確実に予想されている憂うべき予想もある。高齢化による社会の活力の減退はそのひとつである。また若者の気力の喪失は、国の発展のための足かせになるかも知れない。それに発展の中で、破行的に遅れている分野の歪みの拡大も問題である。既に明らかとなってきた国際空港の整備の遅れはそのひとつである。周辺諸国が長期戦略的な視点のもとで開始した巨大空港の整備のなかで日本だけが取り残されて来たことが、誰の目にも明かとなってきた。大都市内の交通の渋滞も慢性化し解決のめどもたたない。更に新技術の進歩が余りにも急速であったが為の遅れも目立ってきた。情報のスーパーハイウエーとその利用技術の遅れは、交通網のかかえる多くの問題とあいまって、社会の効率性に直接に影響することは明らかである。

更に、医療・教育といった日本の社会活動を支える基本的なインフラについても、問題が多い。これらはやがて国民への高負担としてはね返ってくる。既に医療費はGDPの6.8%を超え、高齢化時代を迎え急速に増大していくことが目に見えている。

教育費についても、公的な教育費の他に塾という先進国では珍らしい費

用が家計を圧迫している。しかもそこからは子供のゆとりを奪い将来の日本の社会を担う人々のものの考え方や生活態度にまでマイナスの影響を及ぼすかもしれない。

世界のなかでこのような変化の中にあるのはもちろん日本だけではない。我々の隣人、東南アジアの国々の急速な経済の拡大は日本に直接に影響を及ぼし始めた。また欧米先進国についても、EUの具体化、NAFTAの実現など、これからの日本の運命に直接影響を及ぼすことが明らかな現実も進行し始めている。

このような地球的な変化の中で、日本が更によりよき社会を実現しまた発展していくためには、何を今なすべきかが問はれている。

これまでの日本の足取りを今振り返って見るとき、その功罪についての意見は色々あるが、結果的には我々の先輩は、それほどひどい誤りを犯していなかったことは確かである。

そこで21世紀を間近にして、これからの日本は何を用意すべきかが、いま問われていることは確かである。

しかしそれには適切な方法論を用意することが必要である。ただやみくもに、現場の問題点のひとつひとつに対して対策を考えてみても、その結果は場当たりの言葉通りの整合性のない、そして得られた結果から見て実に効率の悪いことになることは間違いない。

従ってここでは、個々の課題をどう解決すべきかということの前に、どのようなアプローチの仕方をやるべきかという方法論をまず考え、これについての人々のコンセンサスを求め、次にこの方法論をもとに、個々の具体的課題を取り上げて、その解決案を考え、提案するという手順で、その解答を次々と求めて行くというやり方を提案したいのである。

ここ数年の不況を理由に、日本には夢がなくなったという意見もある。しかしそれなら我々が夢をまず画こうではないか、この方法論の第一歩はまず夢を画くことからスタートしよう。それには10年又は20年先の日本がどのような姿になればよいかといった、望ましい日本とはどのようなものかを、まず考えてみることである。

それは予測とは違う、こうしたいという我々の願望の実現した姿である。

夢なのだから、どのようにでも言える。これは現状をふまえての話である必要はない。だがしかしこれは夢だからといって、根拠のない実現不可能な話であっては意味がない。キチンとした整合性のある夢である。たとえば全く貧富の差のない税金もタダの社会といっても、これは実現できるはずがない。ひところ完全非武装をとという話もあったが、これは理想かもしれないが望ましい日本の姿として採用することは不可能である。それは世界の緊張関係がゼロになるということはとてもありえないからである。このようにして、作業の第一ステップとして、実現可能な望ましい日本の姿はこのようにあるべきだということを書いてみる。

次にこの画については皆のコンセンサスがいる。この夢を画く作業がコンセプトエンジニアリングである。どのようにして、日本の望ましい姿を画くかというそのコンセプトを作り出す作業である。

このコンセプトを画くとき、まず必要になるのが技術予測である。現代のひとつの特徴は技術の進歩が早く、そしてこれが社会を変えていくことである。

イラン革命は久しく沈滞していたイスラムパワーの活性化のはしりとなり、世界の中でのイスラムの影響力はまさに予測を許さない状態にある。このイラン革命の引き金を引いたのが、パリーから送られたホメイン師のカセットテープであったことは有名である。このテープが日本のつくりだしたラジカセによって、イランの人々を革命へと駆り立てた。日本の家電メーカーが世界中に売り込んだラジカセというメディアがなければ、ホメイン師の演説はイランの人々に伝わらなかったに違いない。

これはただひとつの例だが、新しい技術は次の新しい社会メカニズムをつくりだす。従って日本の明日の夢を画くためには、このような技術予測が必要だという訳である。

このような技術予測と、日本の現在の社会システムとその変化、変化をすすめている国際情勢などをバックデータとして、10年又は20年後の日本の望ましい姿を画くわけである。これがコンセプトエンジニアリングである。そこでは従っていかにして新しいコンセプトをつくり込むかが勝負であって、過去の延長線上にあるのではない。

このようにして画かれ、そしてコンセンサスを得た答えを目標として、日本の現状から、これを実現するために、明らかになってくるボトルネックをしらみつぶしにリストアップしていく作業が次に必要である。そのネックには各種の法的規制のような、いわば社会の枠組みもあれば、ハブ空港の建設といったこともあるだろう。そのための視点を得るために、国土軸、社会軸の発想が出てくる。これらの軸の上でどのように何が動くかということから、モビリティ、アクティビティといった視点も出てくる訳である。そしてそこから一つずつ明確なプロジェクトが生まれてくるし、その緊急順序も明らかになってくる。

今回の研究会では各委員からそれぞれなりの立場から貴重な提言を寄せて頂いたが、今述べたような視点からこれを整理して行くとその関連が明らかになってくる。そこで委員会での各委員の発言の記録と、事務局に送付された提言とを編集して作成したのが以下の新社会資本についての委員会報告である。

## 日本の新しいマスタープランをめざす

- 目的：
- ① これまでにない複層した経済問題を主とする危機からの脱出
  - ② 21cへと確実につながる新産業を獲得する。  
あるいは組立てをもって、そのアプローチを始める。
  - ③ 国民・国家としての新しいコンセンサスある夢を獲得する。  
あるいは組立てをもって、そのアプローチを始める。
  - ④ 実行力あるプランとして、上記各項の行動計画 及びその構想を第五全総への組立てを主にしながら分かり易く示す。

新しい社会資本の構築に向けて  
イメージとしての総論

新しい社会資本の構築のために、「新しい豊かさを求めた熱い目標」と「分かりやすい組立て」が欲しい。

そのために、これまでの「資本及び制度に対する全く新しい考え方」が必要である。

ここから「新産業創出をも含めた日本の新しいマスタープラン」を構築していくために、「生活者及び地域視点への重視と構造的な検討」を行い、「広域連携、国際連携、新産学官連携への関係開発」が必要となってくる。

これら関係開発を行っていくために、その行動（コンセプト・エンジニアリング）及び行動目標（プロジェクト・マネジメント）として、「内なる改革、外への貢献」を合言葉とし、また「人の生きていく場所をつくり得る真のディベロップメント手法」がまさに必要となっている。

それは具体的には、①「地域の自律と社会域の関係開発」、②「より新しい豊かさ追及理念からなる求められるべき新しい国土計画」、③「新しい効率のもとでの複合・統合化による新しい社会資本の構築」への厳しい検討と、構造の構築化を示している。

これらへの立案化が、マクロ・ミクロに共有する「すでに高度統合化された社会資本」として獲得できるであろう。

ここで初めて、「国民的なコンセンサスを得た新しい社会資本」として、また「国民が自律的に動けるようなマスタープラン」として、提案できるのではないだろうか。

新しい社会資本の構築に向けて
----------------

「新しい豊かさ」を求めることで始まる

- 留意点： ① コンセプトの明確化  
 ② 国民的コンセンサスが必要  
 ③ 国際連携／広域連携／新産学官連携 の関係開発

獲得のためのアプローチ：

「誰にとっても熱い目標とわかりやすい組立てを求めて」

1. 生活者・地域視点における制度の捉え直し
2. 資本の見直し  
 ——新しい資本、新しい生産のあり方

新しい効率性の追及

社会資本の複合・統合へのオペレーションと そのノウハウのあり方

- ① 社会域とその成長の構造  
 — 国土及び社会資本における社会資本の最小単位の完成化を目指す。
- ② 国土計画と社会域への具体的考察  
 — 日本の新しいマスタープランとしてのマクロな形成のあり方を示す。
- ③ 新産業創出の構造試論  
 — 前2項の成立のための基本条件

[ 具体的方法論 ]

1. 「コンセプト・エンジニアリング」  
 — まずは目標ありきで、分かり易い組立てが必要。
2. 「プロジェクト・マネジメント」 — 久保岡委員の提案材料
3. 新資本概念からなるアクティビティ理念
4. 国土計画における社会軸の構築コンセプト

[ 目標獲得のためのイメージワーズ ]

1. 「内なる改革、外への貢献」
2. 人の生きていく場所をつくり得る真のディベロップメント手法
3. 国民が自律的に動けるマスタープラン
4. 地域の自律と社会域の関係開発

これまでに提案された社会資本整備におけるニュー・コンセプト  
及び 協力各位からのコメント

- 「コンセプト・エンジニアリング」 (唐津)
- 「社会軸」「社会域」 (藤井)
- 「プロジェクト・マネジメント」 (藤井・久保園・事務局)
- 「新しい豊かさ」 (飯田)
- 「元気の出る社会資本」 (牧野)
- 「社会資本アセスメント」 (唐津・事務局)
- 「アクティビティ・マップ」 (藤井・事務局)
- 「資本及び制度の捉え直しからの社会資本・公共投資」 (高丘)
- 「ものづくりコンセプトからの新「製造業」の提案」 (小長)
- 「資本の捉え直しからの社会資本」 (吉川/経済企画庁)
- 「橋頭堡 内なる改革、外への貢献」 (香田/工業技術院)
- 「人の生きていく場所を創り得る真のディベロップメント手法」 (長谷川)
- 「国民が自律的に動けるようなマスタープラン」 (平岩)
- 「実感のある国を創るために一積み残されたボトルネックの克服」 (権太)
- 「地域の自律と社会域の関係開発」 (宮田/長洲町長)
- 「国際連携・広域連携・新産学官連携 の関係開発」 (薄井/日本開発銀行)
- 「高度情報福祉社会」 (杉森)
- 「均衡・分散の次に来るもの」 (大石/国土庁) - 藤井より

「モビリティ」から「アクティビティ」へ  
「国土軸」から「社会軸」へ  
「地域」から「社会域」へ  
「社会資本アセスメント」の提案

社会資本グランドデザインについてのメモ

H6 / 2 / 1

1. 全体の組み立てについて

- ・ テーマが非常に広範囲であり、かつ、複雑であるため、すべてを尽くすのはい  
ずれにしても不可能
- ・ そのため、「提言」という形にして、骨太かつ簡潔に記述するのはどうか。
- ・ 各論は異論のあるところはあるところとして、参考として後ろにまとめて記述  
してはどうか。
- ・ 本研究会発行者の問題意識としての熱意、新しい組み立てへの熱意をレポートの骨子そのものとして  
出していったらどうか。

2. 構成案

(1) 現状認識と提言の意味

※. パラダイムはキックコー.

・ 時代背景

- 戦後型の成長指向の社会の行き詰まり
- 国際社会における日本の立場の変化
- 二極構造の崩壊
- 経済大国としての日本

国民の価値意識の変化

情報化社会への変化

高齢化社会の訪れ

狭い地球（有限な資源）と環境問題

・ パラダイム変換の必要な時代

- 政治改革、経済改革、行政改革が叫ばれている
- 平岩委員会をはじめいろいろの機関で検討

・ ここで、視点をかえて、大筋の方向性を示すのも意味あり

・ 「誰にとっても分かりやすく、

誰にとっても熱く胸をうつ目標と組み立てが欲しい」

(2) 「新しい豊かさを求めて」をキーワードに（基本的方向）

- ・ 物質主義、効率至上主義からの脱却
- ・ 環境にやさしい社会、省資源、省エネルギー社会の構築
- ・ 質の高い社会資本
- ・ 日本のアイデンティティ（歴史、文化）と社会資本 —— 地域文化の見直しが  
始まっている。
- ・ 地域の特質を生かした社会資本整備（地方の時代への対応）
- ・ 新しい効率性の追求
- 投資配分の見直し
- 社会資本整備の連携、複合化、総合化
- ・ 国民意識の変化、ニーズの多様化に適合するためには目標と組み立て  
の変更が必要
- ・ 21cへのグランドデザインへの絵がほしい。
- ・ 新しい豊かな国民生活とは何か。1-



## (3) コンセプトの明確化・・・誰にとってもわかりやすい目標の提示

## ・目標の明確化の必要性

参加の時代、価値の多様化

目標の喪失の時代（欧米追随からの脱却）

国民的コンセンサスが従来にも増して重要

しかし、従来のようなトップダウン方式ではだめ

コンセンサス形成の新しい工夫が求められている

プレゼンテーションによる発信とコンセンサス

・ コンセプト・エンジニアリング の導入・ 「社会軸」を基軸とする日本の新しいマスタープラン

近未来の重ね合わせ、インターフェューチャー

社会的コンセンサス、未来へのベクトル

たとえば社会軸の地球平面への投影像が国土軸かも

個別には、情報ハイウェイ、リニア新幹線、高速道路

・文化軸

・人と人の結び付き

・地域同士の結び付き

## ・ 「新しい社会資本整備」の推進を

## ① 技術革新に伴う新たな展開

情報ハイウェイ、リニアなど全く新しいもの

既存の社会資本の付加価値の増大

情報システムとの組み合わせ（路車間情報システムなど）

## ② 社会資本整備の複合化などによる新たな作り方

社会資本の連携、複合化、総合化

## (4) 新しい組み立て、リストラクチャリング

## ・ ソフトが重要な時代

大プロジェクトから地方の小プロジェクトまで

効率的で、かつ質の高い洗練された整備が必要

社会資本（ハード）を生かすソフトが不可欠

・ プロジェクト・マネジメント の重要性

日本全体の各プロジェクトの総合化から個別のプロジェクトの推進まで

人、体制、ノウハウ（技術）の集積が必要

## ① プロジェクト・マネージングの導入

NASAの例など参考に

## ② 未来への夢を（元気のである技術）

ex 宇宙開発など

「技術の進歩は元気のもと」

技術革新を原動力に新しい豊かな社会を構築

③ 新時代に応えられる 人材 の育成

人の能力・発達の可能性

④ ボーダレス時代に対応した 国際関係 と視野に入れた 社会資本整備

— ODA のあり方、

⑤ 「アクティビティ」への考え方の導入⑥ 「地域」から「社会域」への考え方の導入

## — 社会資本プロジェクトが欲しい —

940422 事務局素案  
鈴木×モ

「新しい豊かさを求めて」  
そのために  
「資本の見直し」  
が必要。

この上で分かってきたことは、

長引く複合不況、生活の目的等を含む、

「景気対策・経済対策」

— 短期で考えていくこと

「新産業の創出」

— 中長期で考えていくこと

「新しい社会資本・公共投資への考え方」

について、現在、同時に考え、早急に具体策を練ることが必要である。

これらに対応するために、気付くべきことは、

基本的に「国民的コンセンサス」のある「夢」がない ————ということ。

この上で、この夢を獲得するために、

まずは「コンセプト・エンジニアリング」を提案する。

夢の形成を妨げるさまざまなボトルネックを抽出し、これらを技術予測によってどこまで解消できるのかを検討し、かつその実現に向かいたい。

ただし、これまでのような技術論一辺倒であったり、プロジェクト志向主義では、この夢は創り得ないだろう。

おそらく、これからの「国民的なコンセンサス」を得ることのできる夢というのは、「生活者重視」あるいは「地域重視」が真に何であって、どのように組み立てられるのかということに大きなきっかけがあるように思われる。

つまり、ここで今回の「社会資本研究」が、「短期における景気対策」と「中長期での新しい産業形成」とを、同時に、あるいは継時して考えなくてはならなくなっている。

これらのことより、

「国民的なコンセンサス」を得る夢、目標が、最終的には  
全ての日本を具体的に包み込む、新しい「国土形成」に向かっているのではないが  
—————と考えざるを得ない。

これらの推意経過を立てるのであれば、  
 これまでの日本が総意として有してきた合理性、効率性を含む、生産のあり方、  
 豊かさのあり方、つくり方を、全く考え直さなければならない。

新しい方向を考える上での、一つのきっかけとなる指針は、生活者及び地域のあり方  
 計画と国との間にある、制度資本・知的資本をめぐる大きな矛盾にある。

また、これらこそが、社会資本をめぐるプロジェクト優先、技術論優先を超えた  
 最終的なボトルネックの解消に当たるといっているのであれば、  
 ここでこそ「資本のあり方・見直し」「生産のあり方・見直し」が追及され、何らか  
 の具体的な構造を有する新しい指標が必要とされてくるだろう。

つまり、ここの指標の提供になるものが、「社会資本アセスメント」の提案であり、  
 このアセスメントが何であるのかを考えなくてはならない。

#### 「社会資本アセスメント」提案のためのアプローチ

- 「モビリティ」にかわる「アクティビティ」
- これまでの「地域概念」から「社会域」といわれるものへ。
- これまでの「国土軸概念」から「社会軸」といわれるものへ。

- 別口
- ① 地域間交流の真の現状
  - ② 「定住」→「交流」→「？」 このあり方と、  
「交流」を満足させる求められる次のステップとは？
  - ③ アセスメント提案への指標試論（構造の紹介）

※ 実例 (①地域間、②日本全体)

社会軸への  
 検討試論

社会資本整備として、日本の地図におとす作業

試論として描いてみる。

不安定な国の政策、経済対策に惑わされることのない、自律したマネジメントを  
 有するプログラムを建て、これらをすみやかに実行することのできる方法を立案  
 しなければならない。

↓

「プロジェクト・マネジメント」の提案

これらの理念に  
 裏付けされた  
 国家プロジェクト  
 の提案

試論として描いてみる。

## 「資本の見直し」について

- ・ 現在よりも [より活力があり、より創造的で、より知的な社会] に向けての社会資本整備が必要。
- ・ 「人の生きていく場所をつくり出す」ための、真のディベロップメント手法を考えるべき時にきている。

資本の見直しから、あるべき資本の組み立てへ。

## 検討すべき内容

### 理念の世界

「個」と「公共」  
「採算性（投資効果）」  
「質の向上＝グレード」

生活者重視  
地域重視  
を支える真の資本のあり方・考え方

### 組み立て方 真のディベロップメント手法 —————▽

「日本の特性を踏みたマスタープラン」  
「街づくりに関連した資本財」

ここから新しいあるべき社会資本を考えるべき。

### 具体性の世界

それは、  
[より活力があり、より創造的で、より知的な社会]  
の創出である。

具体的には、  
「知的資本」「制度資本」を組み直すこと  
(＝マネジメント) である。

そのための指標として、  
「社会資本アセスメント」を提案する。  
この時点で既に「資本」は新しく見直されたと解釈できる。